

一人っ子の主観的な体験が対人関係構築に及ぼす影響

妻 木 優

1. 研究目的

本研究は、一人っ子の個々の家族等との関係性のパターンを一定網羅した上で、その情緒体験や家族等との関係の取り方のプロセスを明らかにすることを目的とする。具体的には、きょうだいからのサポートが得られない一人っ子は、きょうだいがいないことについてどのような情緒体験をし、どのようなサポートを求め、対処したのかについて家族イメージ法 (Family Image Technique) を用いた半構造化面接を実施した。一人っ子の語りの分析を通じ、一人っ子の生い立ちにおける対人関係についての思考や感情、対処行動のプロセスを明確化することを目的とした。

2. 研究方法

青年期の一人っ子10名 (男性4名, 女性6名) に家族イメージ法を用いた半構造化面接を実施し、得られた語りをModified Grounded Theory Approach (M-GTA) を用いて分析を行なった。

3. 結果

M-GTAによる分析の結果、30の概念と7つのサブカテゴリーを経て、【繋がろうとする】と【孤高であろうとする】2つのカテゴリーが生成された。【繋がろうとする】においては、《家庭内に繋がりを求める／与えられる》と《社会に繋がりを求める／与えられる》という2つの対人交流の動きにより、《一人っ子 (ひとり) であることを引き受ける／受け入れる》プロセスがあることが示された。同時に、【孤高であろうとする】においては、《家族からの干渉を自覚する》も、《付き合う集団を限定》し、《社会での協調性の難しさ》を体験することで、一人である方が楽だと感じ、意識的に一人でできることや一人の時間の過ごし方を獲得していく、《ひとりでいようとする》プロセスも見出された。

4. 今後の課題

今回の調査では、一人っ子が、きょうだいがいないことについてどのような情緒体験をし、どのようなサポートを求め、対処したのかについてのプロセスを明確化することができた。本研究では、M-GTAを用いて分析を行ったが、【孤高であろうとする】カテゴリーは調査協力者によるデータが少ないまま概念生成を行ったことから、一般化は慎重に行っていく必要がある。今後は、量的研究を通じて【繋がろうとする】傾向が高い者と【孤高であろうとする】の傾向が高い者とのパーソナリティやソーシャルサポートの違いを明らかにしていくことで、一人っ子に関する新たな知見を得ることができると考えられる。